



TITLE:

(随想)研究の組織化

AUTHOR(S):

高井, 修道

CITATION:

高井, 修道. (随想)研究の組織化. 泌尿器科紀要 1960, 6(2): 83-84

ISSUE DATE:

1960-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111910>

RIGHT:

泌 尿 器 科 紀 要

第 6 巻 第 2 号

昭和 35 年 2 月

随 想

研 究 の 組 織 化

札幌医科大学教授 高 井 修 道

最近の医学の進歩は実にめざましい。各分野に亘つて著しいものがある。吾が泌尿器科領域に於ても然りである。併し研究が進むにつれ、余程の天才の出現しない限り、一人で行つた研究業績は実に微々たるものである。このことは、学会で発表される個人の研究報告と宿題報告や総合研究報告とを比べてみると分ることだが、研究の組織化の必要を痛感させられる。

研究の組織化は出来得る限り大がかりなものがよいが、大きくなればなる程組織化は困難になる。2～3年前から、我が国でも泌尿器系腫瘍の記録部が出来て、膀胱腫瘍と前立腺癌に関して臨床統計が日本中の大学及び大病院から集められた。一定の規準で極めて多数例について、詳細に亘り検討されたものであり、私個人の考えでは、これ迄の如何なる報告よりも立派なものであり、最も貴重なものと思う。併し実のところ、私の大学の症例に関する限り、報告提出の1年前よりの症例、つまり詳細な検討用紙が来てから以後の症例だけは出来得る限り正確に忠実に記載出来たが、それ以前の症例では、必要と知りつつも病歴に記載もれがあつたりして、不明の個所をブランクにしたところが幾つかあつた。集積にあたつた方方に変惑をかけたことと思ひ、慚愧している次第である。これ以来、報告用紙と同型のものを多数印刷して患者の来る毎に病歴にとちて、廻診の度に、又退院の際に記載洩れの無い様に心がけているで、非常に完全な記録が出来ている。4～5年或は10年先に調査を依頼された場合には、完全なものを提出することが出来ると思う。これにこりて、私は主要疾患に関して主な調査項目を印刷した用紙を用意して、病歴につけて記載もれない様に努力しているが、調査項目にしても、自分なりに決めたものであり、又他の大学でもこれと同一規格で同様にやつているかどうか分らない。そこで私は主要疾患について、この様な全国的組織が出来て、夫々の代表者を何人か決め、調査報告を検討し発表して討論するといった様なことが出来ないかと希望している。

私は先年「尿路結核の最近の動向」という論文を書いた時、色々の文献を調査してみると、日本では尿路結核は欧米に比してかなり多いはずであるにも拘らず、一定の規準で相当長期間に亘り、多数例について検討した報告は案外少なく、比較的少数例で夫々異つた観点から検討した論文は極めて多い。併し後者は観点が異なるので、総合して集積することは困難であつた。これに反し欧米の症例は尿路結核の患者を一定の Sanatorium に集めている関係もあるが、非常に多数例について幾つかの規準に従ひ、長期間の観察が行われ、非常に有益であり、文献としては主として欧米のものを参考にした。日本に多い疾患ですら、この様

な状態である。だからといって、日本の現状では尿路結核のための Sanatorium を直ちに設けることも困難であるが、せめて数名の代表者によつて、組織された機関に於いて、幾つかの規準を決めて、各大学や病院の症例を綜合すれば非常に立派なものが出来るのではないかと考えた。さて色々と理想的な考えばかり述べたが、実際にこのような組織を作るためには、先づ金と人とが必要であり、実行には多くの困難を伴うことと思うが、いまだしこの方向に進まないものであろうか。

次に各研究機関から報告された論文が何十何百種の雑誌に報告され、文献を整理するのに多大の労力を要する。又時に見逃すこともないではない。私は2、3の親しい方と年間に報告した文献の交換を行なつてゐるが、これだけでも非常に役立つが、一層のこと全国の大学や病院で年間に報告した論文の別冊を全部纏めて互に交換すれば、其の年間に泌尿器科関係で出た論文は先づ全部集まるので仕事が非常に楽になる。勿論、医学中央雑誌も出ているが、抄録だけで結局原著をさがして部厚い本を重ねることになる。文献別冊交換は余り面倒なことではないと思う。現に或る基礎医学の教室では全国的に行つており、非常に好都合だとのことである。併しこれを行うにはやはり一つの組織が必要で、一定の指示に従い、洩れなく実行することが大切だと考える。

色々と思いつくままにだらだらと書いて来たが、日本の如く経済的に恵まれていない国ではせめて組織化によつてよりよい研究成果を得る様努めるべきである。